



福岡県におけるキウイフルーツ病害虫防除暦作成の考え方

福岡県農林水産部 きく 菊 はら 原 けん 賢 じ 次

はじめに

キウイフルーツは中国原産で1900年ごろにニュージーランドに渡り、その後商業栽培が始まった。日本では1970年代に温州ミカンなどのカンキツの価格暴落を機に転換作物として導入された。福岡県では、2023年現在の栽培面積は255 ha（農林水産省、2024）で本県の果樹の中では中規模な品目であるが、堅調な消費により販売が好調で、生産者にも人気のある品目の一つである。当初は病害虫が少ないと思われていたが、栽培が広まるにつれて果実軟腐病が発生し、大きな被害を受けた（高屋、1996）。また、キクピスカシバは2000年代に入るまでは採集例は少なく、果樹の害虫と認識されていなかった（窪田ら、2017）。しかし、2004年にキウイフルーツでの加害が本県で確認されて以降、全国の栽培地域で確認され、重要な防除対象害虫となった（福岡県病害虫防除所、2004）。キウイフルーツかいよう病（Psa1系統）は1980年代に世界で初めて静岡県で確認されたが、その当時は福岡県ではまん延することなく防除対象とならなかった。しかし、2014年にニュージーランド等世界的に流行しているPsa3系統が全国の栽培地域で突如発生し、福岡県でも被害を受けるようになった（菊原、2019）。キウイフルーツは日本で商業栽培が始まってから比較的に日が浅く、新病害虫がたびたび発生してきた。それに応じた防除対策が防除暦に追加され、現在に至っている。

I 福岡県病害虫・雑草防除の手引き

福岡県では農薬取締法第二十八条に基づく指導等を行うため「病害虫・雑草防除の手引き（以下、手引き）」を作成し、ホームページで公開している（福岡県農林水産部経営技術支援課、2023）。手引きには、(1) 農薬適正使用の徹底、(2) 試験研究成果などの新しい知見の提供や合理的な防除のための指導資料、(3) 病害虫および雑

草の発生生態、(4) 総合的病害虫・雑草管理（IPM）の推進、(5) 作物別の農薬一覧が掲載される。この手引きを参考に各地域の普及指導員や農協の営農指導員が協力して栽培暦（防除暦）を作成する。以下にこの手引きからキウイフルーツ病害虫防除対策に必要な内容を編集したものを紹介する。

II 主な病害虫の発生生態と防除対策（図-1）

1 病害

(1) かいよう病

本病は *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* により引き起こされ、複数の系統が知られている。葉には褐色の斑点を生じ（図-2）、Psa1系統ではさらに周囲に細菌病特有の黄色いハローを生じる。枝幹部の病徴は1~2月に白黄色、3月には赤褐色の粘質液を漏出し（図-3）、激症化すると、枯死する場合もある。葉への感染は3~6月、枝への感染は9~2月である。宿主での病原菌の増殖適温が10~20℃の範囲にあるため、低温湿潤状態が続くほど感染しやすく、感染期の強風雨は発病を助長する。罹病組織中の菌密度は18℃を越えるころ（5月中旬）から減少し始め、20~24℃に上昇する過程（5月下旬~7月上旬）で極めて低密度となり、25℃を超える7~9月上旬に最低となり、新梢での発消はこれに符合する。気温が低下するとともに罹病組織中の菌密度は回復し、15~17℃の時期（10月下旬~11月上旬）に急速に高まり、10℃に低下する初冬の落葉期まで続く。病原菌密度増加に伴い菌の飛散が始まる。枝幹には強風による傷や落葉痕から感染する。

【薬剤防除】

落葉期、冬季のせん定直後、発芽期前後、春季の新梢伸長開始期および開花前に防除効果が高い銅水和剤を散布する。‘紅妃’等、本病に抵抗性が弱い品種は樹液流動期にも散布する。5月まで防除が必要であるが、銅水和剤は開花後の防除で薬害が生じやすいので、‘紅妃’の開花後では抗生物質剤等を用いる。

【耕種的防除】

病原菌を含む樹液を多量に流出する罹病枝は発病部位

The Concept of a Kiwifruit Pest Management Calendar in Fukuoka Prefecture. By Kenji KIKUHARA

（キーワード：病害虫，防除暦，キウイフルーツ，福岡県）